

概

説

春野町史概説

―はじめて読む人のために―

原 始・古 代

高知県吾川郡春野町は、土佐湾と高知市、土佐市、吾川郡伊野町に囲まれ、吾川郡南部を占めて面積約四十六平方キロメートル、人口約一万五千人の自治体である。北部山地と南部丘陵との間には、仁淀川の堆積した中央低地が拡がり、人びとの生活の場となっている。

何千年の昔は別にして、最近の秋山山根の発掘によれば、約二千三百年前山根では米作りがはじまり、弥生時代となる。同地は仁淀川の分流沿いのいわゆる自然堤防であって、今も昔も人の住むには好適である。人びとはここに住居を構えて、付近の低湿地にいねを作って暮しをたてる。もちろん漁猟や採集もともに生活の糧をえる道であった。こうした状態はしだいに同じ条件の付近に拡がり、また谷のより奥の扇状地にも及んでいく。

ところで米作りの開始は人びとの暮しを大きく変えていった。とくに有力者を中心にした村ができてきたことは、古墳時代への前進である。いまは滅びたが弘岡中の横手には小さい古墳があった。七世紀ごろの築造と推定されている。ここは前述した低湿地水田と自然堤防に近く、また少し北に行けば荒倉神社もある。有力者は土地と村人を支配するとともに、その先祖を祀って家の守り神とする。春野町の多くの神々は、いまは祭神もすべて中央の神々であるが、本来は村々の有力者―豪族の祖先であったと思われる。

古墳時代は四世紀から七世紀にかけてであるが、この時代には中央政府の勢力も中央の神々とともに及んでく

る。地方の有力者はその支配下に 国造^{くにのみやつこ}や 県主^{あがたぬし}となる。春野町と土佐市とは仁淀川を挟んで以前から吾南、高東と呼ばれて自然的には一地域である。ここに吾川国造が生れたと推定されるのであって、村々の豪族たちは、この広い地域にわたる吾川国造に統一され、さらに大和朝廷の支配に服したものと考えられる。

大化の改新は大化元年(六四五)のことで、その翌年から中央集権の律令制^{りつりょう}―改新政治が動き出す。土佐でも 国造、 県主^{あがたぬし}は廃止となり、新たに 国司・郡司・里長が置かれる。国司は中央より派遣されたが、郡司以下は在地の豪族から起用されたのであって、とくに郡司は国造の横^{よこ}まりが多かったので、吾川国造は改めて吾川郡司となる。こうして以後承和八年(八四二)に仁淀川を境にして吾川郡は、吾川郡と高岡郡に二分されるが、郡衙^{ぐんが}は西分付近に置かれ、ここには郡寺大寺も建てられたと推定され、吾川郡が広い地域にわたっていたものである。

さて郡の下には郷が置かれ、一郷(里)は戸数五十戸からなる規定であった。吾川郡は八郷であったが、後二分されて四郷づつとなる。春野町はそのうち桑原郷と仲村郷(長浜も含む)と次田郷^{すけだ}に当たるといわれる。すなわち桑原郷が弘岡に、仲村郷が西分・芳原・諸木に、また次田郷が森山、秋山、仁西に相当するといわれる。これらの郷にはそれぞれ豪族が里長に任命され、人びとは田地を公平に班給するとともに、人びとから租^そ、庸^{よう}、調^{てう}、雑^{ざつ}、徭^{せう}、出挙^{しゅこ}という重い負課を徴収することになる。仁淀川のあゆや海岸のあわびそれから山野の薬草、家々で織る布や絹がその重要なものであった。もっとも生活の安定も政治には重要である。郡司たちは「セイ本」といって、用水路の水源を整備したり、また農業技術の改善、疫病の対策等にも心掛けているが、もちろん現在の比ではない。

吾川郡の大野郷は土佐郡の鴨部郷とともに、天平勝宝四年(七五二)奈良の東天寺の封戸^{ふうこ}となって、その税収がそのまま東大寺へ納められることとなったが、これはやがて世の中が荘園制へと移る一つの現われともいわれている。天長三年(八二六)には、土佐ではじめて荘園が成立すると記録には伝えられ、土佐郡の久万庄(高知市)と香美郡の田村庄(南国市)とであった。こうして荘園が地方に生れてくると同時に、国司の政治が乱れてくる。国司がその権力を利用して私利を図るに狂奔する時に、起ってくる問題はまず治安の乱れであり、盗賊の横行であった。わけて海賊は多く、第十世紀はその害がとくに激甚であった。こうした時代に吾川郡が二分されたことは、地方政治の正常化への一つの努力と思われるが、またこれと併行して、郡内の郷に再編成が加えられ、桑原郷は大野郷と合併、また次田郷も仲村郷と合併、ついに両郷は歴史の上からは姿を消すことになる。また直接には海賊討伐のため、紀州(和歌山県)熊野神社とこれを守護神とする熊野の水軍が朝廷や院の尊崇を受け、やがて土佐へも先達の努力で熊野神社が勧請され、いまにいたるも芳原や西諸木の若一王子神社として尊崇される。もちろん在来の神と社殿をともにして祀られることが一般的であったと思われる。

国司政治の腐敗はこのようにして律令制を崩壊させるが、郷や荘園のなかには有力者が現われ、在庁^{ざいちょう}―在庁官人と呼ばれる国司の下僚となる。彼らは従来の郡司とも代って在地の実力者となり、広い田地を所有するとともに、多くの下人、所従といわれる隷属者を従えて大規模な経営を持つ。いわゆる長者であって伝説の主人公宇賀の長者はその一人であり、仲村郷の長浜(高知市)に住んだという。こうした有力者はもちろん治安の乱れにみずから武装して武士となり、やがて源平の二大勢力に組み込まれるが、とくに土佐は治承三年(一一七九)、平氏の武力による院政停止から平氏の知行国となり、平氏指揮下に武士は団結する。この代表が、吾川国造の伝統を持つと考えられる蓮池権頭家綱であって、平氏勢力に代わって流人となった源希義を監視し、やがて中世への転換期―源平の対決には、平氏のために源希義を殺害する。

が、わけて歴史の悠遠なのは秋山の種間寺である。その秘蔵する木造薬師如来坐像は、春野町唯一の国の重要文化財に現在指定されているが、その製作は藤原時代―定朝風と伝えられる。また発見された土器片から芳原の柏尾寺の創建も平安時代と考えられ、春野地方にもこのように時代の激動と進歩とがあった。

中 世

源頼朝の実弟希義が、兄の挙兵に呼応しようとして蓮池権頭家綱に先手を打たれ、年越山に討たれたのは、やがて来る中世の幕あけであった。希義の討たれたのは一説に弘岡中の鳥越といわれる。そして希義の子希望は、弘岡とゆかり深い吉良峰城主吉良氏の祖と伝えられる。かくて源平の争覇戦が壇浦(山口県)で終止符が打たれると、土佐は源氏―鎌倉幕府の支配に中世の歴史を綴る。

まず第一にあげられることは、吾川郡が改めて頼朝から京都六條若宮八幡宮の荘園―吾川庄となったことである。同社別当季蔵は大江広元の弟でもあった。平安時代には大野郷は長らく東大寺の封戸であったが、時代の激動を受けて吾川郡の支配も大きく変ったものである。もともと鎌倉時代百五十年間を誰が春野地方を直接治めたか伝えられたものはない。ただ吉良氏が代を重ねていったようである。どこに居住したかもよくわからないが、若宮八幡宮の荘園となったことは、春野町内に八幡宮の多いことからよく理解できる。弘岡上、森山、西分、仁ノ、東諸木と八幡宮は産土神として栄え、ことに西分は六條若宮八幡宮と都での名称をそのままに伝えている。荘園支配は、もとの郡衙跡を中心に徹底していたのであろう。

この間室町時代へかけて春野地方の開拓は進む。これを表わすのは「ヒ」「ヒノクチ」「ヒノシリ」と地検帳に出る用水路の延長であり、水田化の困難であった自然堤防内にも部分的に開拓が進む。また「ノツゴ」「イゲ」と地検帳に出る小祠も、この時点での開拓と無関係ではなく、北部山地、南部丘陵より発源した小溪流の水路化は完成し、兼山時代を待つばかりとなる。

南北朝時代の激動はいち早く土佐に及び、暦応三年(一三四〇)の大高坂城の攻防戦で結着がつき、北朝―武家方として土佐は、やがて香美郡田村城(南国市)に入城した守護代細川氏によって支配されるが、この争覇戦に春野地方は、公家方として戦う。「佐伯文書」に「大野仲村名庄官以下凶徒等」と伝えられるところである。またこれと符節を合わすのは、森山八幡宮の伝誦の、南朝の忠臣日野資朝の子勝朝が土佐に入部したことである。吉良氏は武家方と伝えられているので、ここにはまだ解明されない歴史が埋もれているようであるが、大勢は室町時代へと移っていく。それにしても在地の名主―地主自作農―たちが、時の激動に蹶起したことは、その成長を語るものである。

室町時代はほとんど戦乱に明け暮れて、戦国の代に移ったようであるが、名主たちは所領の開発を進めるとともに、名内に屋敷を構えてこれを土居と呼ぶ。春野町内には、旧村ごとにそれぞれ二―三方所の土居があったことを地検帳は伝える。かつて古墳時代に、各村々に豪族の生れたこといわば再現であった。名主は土居の近くに社寺を建立して支配を固めるとともに、時代に則して武装を整えてやがて戦国武士となる。しかも名主たちはほぼ従来の郷内に地頭―国人を擁して新しい勢力圏を作る。すなわち弘岡吉良峰城の吉良氏、木塚城の木塚氏、森山城の森山氏、仁ノの小島氏である。

吉良氏が戦国時代名君宣経の治世に栄え、「吉良條目」制定のほか、周防国(山口県)よりの南村梅軒を迎えて南学を発祥させ、土佐の教学に先鞭を付けたことは、郷土の誇る歴史の一つであるが、以上の国人たちは、ま

たそれぞれに領内支配を固めたのであって、いずれも境界を定め後の村方の団結の源流となる。もっとも戦国時代の争覇戦が苛烈し、ついに戦禍が春野地方に波及すると、ついに吉良氏は嶺北本山氏のために滅び去る。天文九年（一五四〇）ごろといわれる。宣経死して嗣子宣直はこれを継ぐ器量を欠いたためであって、個人の力量が決定的な戦国の代であった。本山氏は吾南を席卷して浦戸城（高知市）を占拠、また西は仁淀川を渡って蓮池城（土佐市）を奪う。この時西方よりの一條氏とも本山氏は戦う。戦禍は西に東に吾南各地を苦しめたものである。本山氏の吾南占拠もほとんど僅かの間であった。長宗我部氏が岡豊城（南国市）に起り、土佐の中央部を併吞する時、本山氏と両雄並び立たず、双方死力を尽くして決戦する。永禄三十五年（一五六〇—一六二二）の間であったが、大勢は本山勢に不利であり、本山氏は敗退、吾南地方は大体永禄五年（一五六二）ごろ長宗我部の支配下に置かれる。長宗我部元親の弟親貞は、名家吉良姓を冒して吉良を称し、春野地方を支配するとともに、やがて調略をもって一條氏の蓮池城を奪取する。以後長宗我部氏は、土佐をついで四国を統一したが、豊臣秀吉に破られて土佐一國を保つ。

春野地方が長宗我部氏とくにその一族の吉良氏—弘岡様—支配下にあったのは、約三十年間であったが、この間長宗我部氏は主として天正十七年（一五八九）を中心に吾南地方の検地を行なう。その記録は「長宗我部地檢帳」として残され、森山分、喜津賀分、仁ノ村分、弘岡村としてかつての国人支配地ごとに帳面となっている。これら地檢帳の記録は、當時を語るもっとも貴重な史料であるが、これを一読すれば、村々には名主たちが長宗我部氏の家臣として位置付けられ、土地を給与されるとともにそれぞれの村に屋敷を構え、給人として武士であるとともに農業も捨ててはいない。少数の郎党—家来を従えていわゆる兵農両道を兼ねている。名付けて一領具足といわれるものであって、これは長宗我氏を支えた在地の勢力であった。

ところで長宗我部一族の吉良氏であるが、親貞の子親実は、その後元親が長子信親死後の継嗣として、末子盛親を立てようとしたことに反対、元親の謀臣久武親直との対立も加わり、ついに自刃を命ぜられて吉良氏は滅びる。吉良氏は二度滅びたことになる。今も西分に祀られる木塚神社は、親実の痛憤を伝えるものである。しかも長宗我部氏の運命もけっして長くはなかった。慶長五年（一六〇〇）九月十五日の関が原合戦に、西軍—石田三成方に組みした長宗我部盛親は、戦わずして敗走する。浦戸籠城を覚悟して海上をいち早く帰国した盛親は、一領具足を浦戸城に集合させる。もっとも盛親には籠城の決断もなく、考え直して上方に登って捕えられる。一領具足がついで浦戸一揆として壊滅させられたのは、その年十二月三日のことであった。こうして一度は四国を征服した長宗我部氏の栄光は無惨に消え去ったが、一領具足の義に殉じたことはその末路を飾るものであった。

近 世

一領具足の反抗が無惨に鎮圧された後、翌慶長六年（一六〇二）正月山内一豊は浦戸城に入る。ただちに領国経営は進められ、「長宗我部地檢帳」をもとにして、いわゆる兵農分離を断行する。帰順した一領具足は改めて百姓に格下げされ、もはや村々には武士はいないことになる。すでに上方においては信長、秀吉の支配下に大中に進められていたものである。かくて春野地方は、山内氏の蔵入地^{くらいりち}かまたは家臣たちの知行地^{ちぎょうち}として再編成され、旧一領具足を含めて村々の農民たちは近世の百姓として年貢、夫役の負担を課せられることになる。

山内氏の土佐国支配でまず注意されるのは、元和十年（一六二四）より実施の田地割替制^{ほんひやくしやう}であって、従来一領具足に従えられた村方の人びとのうちには、旧一領具足とともに田地の割り当てを受けて本百姓となり、村方

の中核を形成する。以後明治初年の地租改正にいたるまでこの制度は守られ、村方を共同体として支配する根本的条件となる。複雑な手続きを要したが、よく守られたのを見れば、村人が協力するために一つの拠り所となつたことであろう。甲殿の「野本文家書」にはこれの貴重な史料が伝えられている。

山内藩政はやがて年を重ねて安定していったが、とくに執政野中兼山治世三十年は藩政確立の画期であり、春野町はわけて大きな影響を受けたものである。もちろんまず慶安元年（一六四八）以後五年の歳月を要した弘岡井筋の建設である。八田堰を造り行当を切り抜き、諸木井筋と甲殿井筋の二分流を幹線とした用水路網は、吾南平野を残さず水田化する。米麦二毛作は完全に行なわれ、農村として面目を一新する条件を与えられたものである。さらに行当より森山にいたる仁淀川左岸には連続長堤が構築され、荒れるに任せた仁淀川洪水に、はじめ人間の力でもって対抗しようとする。八田堰も弘岡井筋も連続長堤も、その後井奉行を中心に村を支える人びとによって維持され、破壊すればたちまち修理を加えて明治にいたつたものであって、まことに今にいたるまで吾南各村―春野町を結ぶ絆である。

兼山はさらに新田開発を進め、旧一領具足のなから、なお有力な子孫のものを郷士として起用する。吾南各地にも多くの郷士が召し抱えられたが、とくに仁ノの小島一族、弘岡上ノ岡林氏はその適例であった。すでに旧一領具足は庄屋にも起用されていたので、彼ら一領具足の子孫の不満は解消されて、山内藩政は安泰を加えたものである。なお新川町が創設され、弘岡井筋を通じて仁淀川上流へ、また新川川を通じて城下町へと連絡し、商品経済発達への拠点にもなってくる。急速に在地に商品経済は侵入し、時代を進めていく条件となっていく。

兼山失脚後三十年元禄の繁栄時代はくる。兼山建設の用水による米の増産も軌道に乗った時であり、やがて生産力増大の恩恵を受けた豪農が台頭する。まず弘岡上を中心にした深瀬一族であつて、家伝のごとく津野氏の末流か、あるいは地檢帳の伝える弘岡上の深瀬氏かその決定は困難としても、早くも元禄―宝永ごろには、巨富を積んで莫大な藩の用金に応ずることになる。深瀬氏の巨富の原因はじゅうぶん明らかではないが、年貢が重課であつたために、貸米と称して高利で年貢米を融通、また年貢売りと称して年貢のため田地を数年間売買することも行なわれ、それらが米を所有するものを豊かにしたものである。深瀬氏に少しく後れて甲殿にも島田一族が台頭する。島田氏が宝永―享保（一七〇四―三五）年中たちまち数家の郷士となっているのは、深瀬本家が藩政末期まで豪農としての伝統を守つたことと対比されるが、島田一族のように、郷士の株を買い取つて新たに郷士となるものを讓受郷士と称し、藩政中期より台頭しつぎの時代を展望させるものである。

すでに兼山が新川町を創設した所でも述べたように、商品経済はいよいよ激しく農村に侵入し、豪農深瀬氏、島田氏が出現するとは反対に、田地を売り払つて小作農となるものも多く、表向き年貢売りを称しながら実質は永代売りとなる。たしかに田地割替制はある点で農民の田地との結び付きを強くしてはいたが、ここにも表向き相変わらず百姓として圃を引きながらも、実は永小作と云つて、耕作権をようやく保証された小作人となるものも少なくなかつた。こうして農民が貧富に分れていく時代となれば、前述のように郷士が新旧交代して讓受郷士という新しい地主に変わるように、村方での重要な地位を占める庄屋にも新旧交代があつた。

これら新しい型の庄屋や郷士の記録はかなり伝えられ、たとえば深瀬一族の郷士深瀬久右衛門は、高岡村（土佐市）天崎で石灰山を買い取り、その経営によって利潤をあげる。文政年中より石灰の水田への肥料化が進められ、米の増産が約束させられる時代でもあり、藩も新川町に石灰焼を経営、御手先仕成として各村庄屋参加のもとに榮えている。庄屋層も激しく貧富に分れる農民のなかにあつて、年貢夫役を完納させることは、実際ほとんど不可能となるのに対処するため、積極的に商品経済に進出し、納所座を運営して事態の切り抜けを図る。す

に寛政二年（一七九〇）東諸木庄屋堀内市之進が「治生録」を著わして、米作の奨励とともに多くの商品作物の導入に熱心であったことは、まさに時代に先んじようとした庄屋の活動を示すものである。こうした時世の動きが、吾南を後年土佐のデンマークとならしめる端緒であり、米麦のほかに、だいこん、かぶ、くわ等の諸作物は競って栽培されることになる。吾南の後に有名となるれんげもその一つと思われる。

江戸幕府の支配もかくてようやく終末に近づく。この時突如ペリーの来航するすでに以前より、外国船の日本近海に近づくものは多く、早くも文政年中より郷士層は危機感に燃えて駆付け郷士として、浦戸、仁ノ等最寄の海岸に駆せ集り海防に参加する。また庄屋層にも藩の上からの強い転付の締め付けに反感を持つ者が多く、これまた同盟一団結して新しい時態に奮起する。とくにこれら有為の郷士、庄屋層は、藩政中期以後在地村々に自生してきた寺子屋等による教育を受けたものが多く、なかにはさらに城下町に高い教育を受ける機会を持つものもあり、城下町武士が泰平久しきになれて家計は窮迫し、ひいてはその精神も退廃するとは大きく異なる有為のものであった。秋山の島村（細川）右馬丞が砲術に長じ、弘岡の深瀬鍛冶介が剣道に勝れ、また同じ深瀬栄吾らが深く学問を究めて藩からも重んじられる等例証は多い。芳原庄屋にも早く歌人吉本虫夫が出たが、異例とも思われるのは、西分庄屋辻儀之助の姉辻掬水であって、山内藩主一族に仕えて老女として京都に出て、頼山陽とも交友があったと伝えられる。

土佐勤王党が結成されたのは、実に文久元年（一八六一）であったが、これに参加したのは森山出身武政大道があり、また弘岡上とゆかりの宮田節斉も時代に先んじたものである。土佐勤王党は武市瑞山の統率するところであって、吉田東洋を斬って勤王に挺身しようとしたが、山内容堂に抑えられて事志とちがいついに挫折する。しかも時局は急転回を示して明治維新となる。この時吾南各地より戊辰の役に参加するものを出し、西分庄屋辻

儀之助の孫精馬、深瀬一族の郷士貞吉らは、遠く転戦して会津若松（福島県）攻めに参加、壮烈な戦（傷）死となる。新日本の転回に参加してその犠牲となったものである。

他方幕末の非常時局にあつて藩は最後の力をしぼって、開成館を中心に富国強兵策を展開したが、これは巨額の用金を賦課するとともに、藩札大増発によるインフレーションとなり、藩財政はもとより個人の家計も大混乱となり、封建制の断末魔を迎える。結局はこの間に地主層の土地所持を強めることになり、やがて明治維新後の地租改正に連らなっていく。そうしたなかで、近世初頭以来強制的に身分差別を押し付けられた同和部落の人たちが、困難ななかで努力を重ねて日雇いより小作農として土地との結び付きを強め、またみずからの地位に対して激しい怒りをこめて自覚を高め、維新後の身分解放への土台を据えていく。

近代

版籍奉還、廃藩置県によって、封建制が廃止となり、近代的な中央集権国家が成立したのは明治四年（一八七二）であった。すでにその前年に庄屋は廃止されて新しい動きは村々へも及んだが、明治四年以後は身分制廃止―四民平等を中心とする多くの封建的束縛は打破せられて、近代的な息吹きが高まってくる。かくて明治二十二年（一八八九）市制町村制が施行されるまで約二十年間は、村々は庄屋に代って戸長が主宰するいわば戸長制である。戸長の職責は、近世村落の区域内に庄屋の伝統による民政を行ないながら、上からの強力な近代化を推進することであつて、壬申戸籍の作製にはじまり、徴兵制、地租改正、学制実施と矢継ぎばやであった。ことに徴兵制は新しい負担として村人より忌まれ、戸長はために怨を買うこともあつたが、地租改正は封建的土地所有を近

代的土地所有に改変させ、村々に新興の地主層を生み出し、以後村落の指導層を形成する。教育も困難ななかで父兄負担で進められ、その基礎は固まる。またこの間殖産興業政策は進められ、弘岡上の山脇権次父子は土佐紙の発展に貢献し、また西分の辻友政は農林学者田中能男を自宅に招いて農業の近代化を進める。

戸長制のもとで、自由民権運動の激しく進められたのは高知県の特色であって、戸長のいわば諮問に備えて民会ついで村会が生れたが、立志社の民権運動は早くも吾南各地に及び、その発起人に安並正原、千頭正澄らは加入し、さらに明治十二年（一八七九）高知県会の開設となるや、島田糺ただす、吉良順吉、細川義昌らは県会議員―議長等に選出される。時しも弘岡井筋、仁淀川堤防等に地元負担の強化もあり、地租軽減の要求も加わり、吾南地方は打って一丸となって民権運動を支持したのであって、県会で知事と対立したばかりでなく、三大事件建白運動には続々上京し、ついに明治二十年（一八八七）の保安条例による取り締りを受けける。

明治二十二年（一八八九）明治憲法は発布され、日本は東洋唯一の近代国家となり、民権運動はその目的を曲りなりにも達したとして、漸次退潮に赴いたが、なおその余燼は、明治二十五年（一八九二）選挙干渉に爆発し、秋山村を中心にはげしく自由派と国民派は抗争し、ついに二名の犠牲者を出すことになる。しかもこの間の対立には同じ地主層の村落内指導権争いに墮する面もあり、ついにこの以後には自由党―政友会として統合し、一時政争はほとんど収斂きやくする。

さて新しい市制町村制は、すこぶる高度の地方自治を目指す面もあり、当初その実施には難航し、また自由、国民兩派の対立感情もあって、村会は議員欠席―流会を繰り返したが、漸次定着していったのであって、ことに伝統的な村落の共同慣行は、小数の村吏員の執務―地主層中心に落付きを見せ、それによって日清、日露の両戦争は勝ち抜かれる。日清戦争はほとんど政府の手で行なわれたが、さすがに日露戦争には国民の犠牲も大であり、財政上の圧迫も多かったが、これを切り抜けたのであって、その成功の原因に産業、教育の進歩があった。

この期県道および郡道の建設が進められたことは、仁淀川―弘岡井筋―新川町の水路が衰え、陸上交通の強化される始まりであり、今日の春野町の交通路の骨格となるものであった。また林遠里の稲作―深耕、正條植、短冊型苗代はようやく普及して米の生産を高め、近世末期以来のれんげ栽培、石灰施用の栽培技術のうえに、大豆粕、硫安施用もようやく定着し、米、麦と冬間のだいこん、かぶさらに低湿地のい草と繁忙な農作業となる。その間また日清戦争後より、急速に吉良禎吉らにより養蚕業の指導が進められ、一部地主の手作放棄と日雇い層の小作化という条件のもとで、養蚕業は底辺をひろげて盛大に赴く。また度重なる仁淀川洪水に対しては、破損した堤防、水路の修繕強化が進められ、水利組合、水防組合の二本建てによって、村々の協力が得られて近世の伝統をよく近代に延長する。ことに教育は組合立弘岡高等小学校等を育成し、重い負担に堪えて村々の中堅層を養成するとともに、遠く県外に学ぶものもあり、ついに碩学小島祐馬博士も出る。青年の補習教育も進められ、こうした努力が明治四十一年（一九〇九）の義務教育六カ年延長へとなる。

明治末期にはまた村政に問題が多く、名著「西分村史」の編者西分村長小田玉城のごとく、施政に難渋したのも多かったが、第一次世界大戦中の繁栄は米価、繭価、野菜の値上りによって農村を潤おすことも少なくなかった。もっともこれが農民すべてのものになるには、地主小作関係という桎梏しごくがあった。反平均一石五斗―八斗という高額小作料の圧迫下に、養蚕によって僅かに家計を維持するのが小作層の実情であった。そしてまた都市の繁栄は、農村にも一部生活の向上をもたらしたが、むしろ恐しい疾病の蔓延があった。脚氣と結核は青年を蝕くばみ、親はもとより一家全体を絶望に追い込んだのもこの時であった。

ついに米価の異常な値上りによる米騒動を契機に、小作農の怒りが爆発したのは、あるいは当然の成り行きで

あろう。秋山村では事態が切迫したが、なおこの時点では地主小作関係の対立は破局を迎えるには至らず、一部小作の土地返還のほか、多くは検見けんみ—小作料減額要求の程度を超えるものではなかった。克明な日記を残した細川義昌の伝えるところである。したがって、この時点とくに第一次世界大戦後の不況に対する対応は、むしろ自作農中心の産業組合運動であった。地主層の多くは都市に別邸を構え、子弟を遠く遊学させて農業から遊離して寄生化するなかで、急速に村落での指導性は弱体化し、代って自作農が中心となる。この点は水防、水利の指導にも現われ、これを代表するのは弘岡中ノ村の門田益穂であった。伝統のれんげ種販売組合のなから、弘岡上同中両村連合の弘岡産業組合を結成発展させ、農産物の販売を中心に、自作農さらに小作農をも結集して、各種の事業を模範的に経営する。また八田堰の改修および井筋の修理に、近代的なコンクリート工法を加味する等、この期の村落指導者の面目を發揮したものであった。

教育においても、戦前の国民教育の最高峰を現出したのであって、仁ノ小学校長山下長太郎は、村会に痛烈な意見書を送って教育条件とくに理科器械の整備を要求する。その熱意と見識とは改めて評価されよう。また弘岡高等小学校は実業女学校—実科高等女学校を創出しながら発展し、とくに上田盛実校長の時、学校をあげて一団となって成果をあげる。また理論と実践の両面で県下に知られた安並馬吉伊野小学校長も出た。こうした風潮は在地の農村青年を刺激し、農村文化は成長、とくに仁ノに橋本一郎を中心に短歌愛好のグループが生れ、歌誌「濤音」は活躍する。さて民権運動衰微後も、吾川郡は政友会の地盤として、明治後半島田紘、細川義昌を国会に送ったが、明治末期より大正期にかけて憲政会—民政党勢力は進出し、両者互角となって対立したが、他方大正デモクラシーの風潮は波及し、とくに全国水平社の結成に呼応し、春野地方にも弘岡水平社が結成される。主として国沢亀かめの指導によるものであった。かくて第一次大戦後の労働運動の高まりに応じて、ついに普通選挙

法が可決成立となり、さらに昭和三年（一九二八）には、第一回の普選が実施される。高知県ではなお無産議員を出すにいたらなかったが、ようやく革新を求める風潮は漲ってくる。翌年の県の産米検査強行の方針決定に、はげしく抗議して農民運動は展開する。とくにこの年はアメリカに大恐慌が勃発し、翌五年（一九三〇）には日本へも波及し、いわゆる農村恐慌として、米、繭の暴落となる。ここに空前でありしかも絶後ともいえる小作争議が吾南、高東に展開する。身は地主層の出身ながら、深く人道主義に徹した岡崎精郎の指導により、昭和八年（一九三三）以後ついに時局の重圧によって争議が終結するまで、秋山、仁西を中心に、小作料滞納、地主の土地取り上げと植え付け、実力によるその阻止と激しい争議となる。結局は小作側の敗北に終わったが、こうした戦いの歴史が、戦後の農地改革に通じるものであった。

また繭価の暴落による収入の激減は、農民とくに養蚕農家を苦しめたので、産業組合的発想により、吉良禎吉らの指導によって海南繭糸販売組合が結成される。弘岡上の南端寄りに天を仰いだ煙突の記憶はまだ鮮かであるが、ついに養蚕業の起死回生は成らなかつた。もともと大正期以来の連続する不況のなかでの、農民の努力はますます、米麦のほかに伝統の野菜とくに西瓜等に力を入れ、この期を加えていわゆる土佐のデンマークの名を称せられる。とくに小作層より頭角を現わして生産力発展に貢献する者がたことは、戦後に展望を持つものであって、前田福太郎氏の加温によるなすの栽培はその代表である。また西瓜栽培の技術指導に大きな役割を果した松本長身氏は、長い農業指導の伝統を持つ農会の功績の記念であろう。

こうした不況のなかで、国、県の農村への挺子入れは進められ、八田堰が近代的なコンクリート工法によって大改修を加えられたほか、時局 匡救きょうきう事業として農道改修等の土木事業が弘岡上、中両村を中心に行なわれ、さらに低湿地を二毛作地へと耕地整理が中山泉らを中心に西分等に行なわれたが、これらもいずれも戦後への展望

を持つものであるが、昭和六年（一九三一）の満洲事変勃発後、日本の進む道は軍部とくに陸軍の指導する大陸進出の強行であって、その結果はついに第二次世界大戦となる。大正末期より思想善導を中心に青年層への農本主義的軍事思想は普及し、村々に満ち溢れた青年のエネルギーは、こうした無暴な戦争に投入される。国際的な孤立と、戦争の消耗に堪えることのできなかつた国内経済の弱点は、ついに敗戦となるが、その間に課せられた動員と、生産の重圧は想像を絶する苛酷なものであった。食糧増産の至上命令に、労力不足、肥料不足、農具不足とないものづくしのなかで苦闘はしいられる。事実昭和十二年（一九三七）日華事変勃発直後の大動員、さらに太平洋戦争突入直前の大動員のほか、動員は昼夜を問わず、一度赤紙を受ければ一切は終りのなかで春野町にも応召者約一万人、内戦死者八百人、そしてついに敗れ去る。栄光に満ちた郷土部隊の終末は、わが春野町南部丘陵の高森山であった。荒廃した国土と疲れきった人びとを残して戦は終る。

現 代

戦は終わった。戦場から都市から外地から帰郷した人びとは、故郷を守った人たちと力を合せて復興に努力する。恵まれた風土に歎を振ってまず食糧増産であった。さて占領軍はいわゆるポツダム宣言により日本の民主化を推進したが、その第一として女子の参政権があり、従来ほとんど完全に政治から疎外された女性も男子同様となる。政治が台所に直結とはこれである。また長い歴史を持った地主小作制がついに崩壊する。いわゆる農地改革であって、久しい間待望された耕作者の土地所有が、ついに実現したものである。岡崎精郎の苦闘の歴史を追想すれば、まことに感無量というほかはない。かくて多くの自作農は生まれ、農業生産力の担い手として現在に

いたっているが、先人の苦勞を忘れることなく、また土地をえて満足することなく、常に新しい時代への前進を忘れてはならないであろう。

新憲法は昭和二十二年（一九四七）五月施行され、平和国家、文化国家、福祉国家を目標に新日本の歩みは開始されるが、それにより戦時中の上からの市町村に対して、新地方自治法の示す地域住民の、住民による、そして住民のための市町村造りが進められ、その第一歩として首長公選となる。昭和二十二年（一九四七）四月のことである。以後困難ななかで、従来の村落の枠内で必死の復興への努力が約十年つづけられる。困難な食糧供出はようやく解決されたが、学校建築等難問を抱えながら、地域住民の要望に答えることは、まことに至難中の至難であったが、この期に、戦後の地方自治制の進路の確立したことは評価されるべきであろう。森岡深太氏の弘岡中ノ村における失対事業の創始、前田^{みよかみ}酒^{さけ}氏の仁西村での治水対策があげられよう。

ところで戦争と戦争直後の南海地震のため、弘岡井筋、仁淀川堤防の荒廃は激しかった。これらの修築強化は、吾南地方にとっては緊急一日も忽せにできぬものであった。その他教育施設あるいは福祉関係の改善も従来の小村でもっては到底力に叶わぬことであった。たまたま国が税制改革を機に市町村の合併統合を進めるや、春野地方の人びとも時代の動きに則応して、合併による大規模村へと取り組む。合併は長い伝統の止揚^{しやう}によらねばならない。事は云うほどに簡単ではない。小異を捨てて大同に就き、まず池上藤馬を村長に諸木、芳原、秋山三カ村で平和村を、ついで歴史床しい名も春野村として吾南全村は大同団結する。実に昭和三十一年（一九五六）九月三十日のことであった。事に当たった人たちの粘り強い努力と、合併の必要を理解してこれに協力した人たちに改めて敬意が表されよう。初代村長に中島精一郎、ついで横田百喜氏、さらに桑名健吉氏と続き、現在四代目中山昭氏となる。春野村も春野町と改められたが、今や合併以来二十年である。

合併後の発展はまったく偉大である。仁淀川に沿う連続長堤は、行当より仁西にまで延び、国の直営とあって地域住民の負担を離れながら、ほとんど洪水の危険から完全に吾南は守られた感がある。また仁淀川上流の愛媛分水を機に、弘岡井筋に大改修が加えられる。八田堰をはじめ用水路は完全に近代化され、井奉行や常設委員の苦心もほとんど昔語りとなろうとする。事に関係した勝賀野泰長県議らの努力も記憶されるべきであろう。

また町の北西部を斜断する県道高知―中村線は改めて国道五十六号線となり、ここにも国、県の投資が行なわれ、待望久しき荒倉トンネルは昭和二十八（一九五三）年開通、さらに最近に上り下り一方通行の複線となる。鶉坂の坂路や茶店のことももう大方は忘れ去られたことであろう。大正十年（一九二一）悲劇のあった仁淀川渡り場も、すでに鉄橋化していたが、増大する自動車交通に備えて新しく仁淀川大橋が架設される。こうした交通路の整備は町内の県道および町道の急速な整備となり、ほとんどの道路がすくなくとも簡易舗装となり、自動車時代にマッチする。これらは町村合併への条件であり、またその成果ともいえる。

人家のほとんどなかったところに、忽然と白垂の新庁舎の生れたのは昭和三十七年（一九六二）のことであったが、これは合併のシンボルであり、続いて学校の統合は進められ、小学校は春野東と同西の二校となり、中学校は春野中学一校となる。自分の丘を崩して校地を造成した春野中学は、長い歴史を綴って吾南教育のメッカであった弘岡高等小学校の伝統を、さらに発展さすべきものであろう。戦後教育は新教育―個性尊重をモットーに父兄と教師はPTAとして団結、困難な条件を克服したが、その間教員組合も結成され、相まって新教育を推進する。いわゆる勤評問題等教育界を難渋させる問題もあったが、大黒武男氏らの努力によるPTA、あるいは上田茂穂教育長らの指導する村（町）教育委員会の尽力によって、春野地方では問題が平穩に処理され、ついに学校統合にまで及んだのであった。小学校は村人の心の故里として人びとに強く結びつく伝統がある。これらの伝統

の拠り所となる旧校舎は、あるいは取り毀されたり、他に転用される。寂寥を感じる人も多いと思われるが、教育水準の向上は、施設のすぐれた規模も大きい学校によらねばならないであろう。統合の円滑な進行は、人びとがこの点をよく理解したことによるものである。

戦後文化国家建設を目標に教育の復興が進められた時、男女青年団の活動は、はなはだ活発であって、大正デモクラシーの復活と考えられたが、旧村単位の青年団活動は合併後経済成長のなかで低調となり、代って教育委員会の中村忠公民館長ら指導の公民館活動として、広く社会―成人教育全般が進められ、多くの町独自の講座が設けられて町内の人びとに期待されている。

戦後十年間の旧村単位の自治が、試行錯誤のなかで暗中模索の苦心を続けた時は、また春野地方の目玉ともいえる農業にも厳しい年月であった。当初食糧増産中心に急速に農業は復興する。もちろんその間にもいもちによる大減収等の不幸もあったが、概して作れば売れる物不足の時代であった。しかしながらやがて食糧も安定し、社会の需要に変質が起るとき、これに急速に対応しなければならぬ。これはおそらく永い農村の歴史で最初のことであったろう。それこそ暗中模索であった。この時終戦以来一貫して農業―農村を指導し、重要な裏方の役割を果たしたのは、吾南農業相談所であった。自転車乗り廻して、昼夜を問わず村々に向いて相談に乗ったその努力には、改めて敬意が表されるであろう。その役割は現在の園芸高校に継がれよう。

かくて昭和三十五年（一九六〇）以来の経済成長によって、比較的安定した市場は確保され、吾南地方はここに伝統の土佐のデンマークを發展させ、ビニールハウスによるいわゆる施設園芸を軌道に乗せる。もちろん多くの問題はあがるが、豊かな収入は約束され、農家経済は空前の潤いを見せる。また都市近郊という有利な点を活かして、高知市に職を求める人も増加した。かつて多くの教員を出した春野地方は、時代とともにその職域を拡大し

たものであって、ここにも経済成長の恩恵がある。

こうしたなかで、長い差別の歴史に終止符を打つための努力が、同和教育、同和对策事業として進められている。昭和三十二年（一九五七）の南部の隣保館の建設はその嚆矢であったが、以後南部大火の復興から、最近の国の同和对策特別措置法施行による町の同和对策室設置、さらに新装成る町民館へと町の努力には見るべきものがあり、とくに学校教育、社会教育の両者を通じて同和教育をその柱とする。国民的課題が達成され、差別のあとを断つ日の遠くないことを思わせるものである。

合併以来ここに二十年、その歩みは以上のように見事なものであったが、長い苦闘の歴史からいえば束の間でもある。現在の繁栄を思うにつけても過去を知ることが重要であって、いずれも先人たちの粒々辛苦の成果と云えよう。改めて先人に感謝を捧げたいものである。そしてそれが未来の困難を解く道と思う。

「往事を述べて来者を思う」原漢文「史記」

自然編